



独立行政法人
大学改革支援・学位授与機構
National Institution for Academic Degrees and Quality Enhancement of Higher Education

機構ニュース

Vol.227 2022 May

今月の記事

Top News

研究開発部新任教員紹介 1

学位授与事業

短期大学・高等専門学校卒業生等を対象とする単位積み上げ型の学位授与関係
..... 6

学位審査会専門委員協議会の開催について
..... 7

評価事業

○ 令和4年度認証評価機関連絡協議会評価担当職員研修の開催について 8

機構の窓

○ 新型コロナウイルス感染症対策 について 9

主要行事日程

○ Schedule (5月～6月) 10

TOP NEWS

研究開発部新任教員紹介

令和4年4月に研究開発部には3人の教員が新たに着任しました。坂口菊恵教授、李敏教授、橋爪宏達特任教授です。この方々には、これまでの経験とこれからの抱負を中心とした自己紹介をお願いしましたので、掲載します。お読みいただき、その人となりを含めてご理解される一助となれば幸いです。

また、4月からは新たに濱中義隆氏（国立教育政策研究所高等教育研究部副部長・総括研究官）と堀田泰司氏（広島大学教授・副理事）に客員教授に就任いただいております。堀田教授には昨年度まで機構に設置された高等教育資格承認情報センター（N I C）のセンター長に就任いただいております。その経験を踏まえ、シニアアドバイザーとして今後も同センターの運営にご協力いただくこととしています。

これに先立ち、本年3月をもって、菊池和朗特任教授及び飯野正光特任教授が機構を去られました。両特任教授は主として機構の学位授与事業において重要な役割を果たされました。両特任教授は学位授与事業全般に参画するとともに、特に菊池特任教授は、平成27年に導入された「特例制度」の検証作業を先導され、また、飯野特任教授は医学関係諸分野における学位審査の中心的役割を担われ多大な貢献をなされました。

当機構研究開発部では、その学位授与機構の発足以来、数度の名称変更、組織改編を経つつも、一貫して機構の事業を支援する学術的知見及びシステム開発のための研究及び将来に向けた実証的、理論的調査研究活動を展開してきました。令和3年度においては、その調査研究機能をさらに拡充し、活動の活性化を促進すること目的として、機構長の裁量によって重点的な予算配分の措置をいただき、一部の成果はすでに学会等において発表されています。

これらを含む研究開発部における調査研究活動の状況については、独立行政法人としての業務実績報告書にまとめ公表するとともに、J S T が運営する researchmap において教員ごとに業績を報告しておりますのでご参照ください。

研究開発部長 土屋 俊

○坂口 菊恵 研究開発部教授



この4月からお世話になっております。

考えてみますと、これまで紆余曲折を経つつ「大学」というものとかかわってきた自分にとって、機構の事業にかかわらせていただくことには運命的なものを感じます。地方のあまり裕福でない家庭に育った者にとって、高いお金をかけて高等教育を受ける意義というのは子どもの頃から謎でした。学校の先生や医者以外に、周囲に大学を卒業した人のロールモデルが皆無で、都会の生活の情報源はテレビドラマくらいしかありません。地元を離れて「内地」の都会に出たいという強い希望は持っていましたが、大学受験はそのための方便でしかなく、高校

現役の時に唯一受験した気象大学校は学科試験で敗退しました。20歳で家出同然で上京してフリーターとして生活し、「やはり大学には行っておいた方が有利なのかもしれない」と思い立ったのが22歳の時。通信教材のおかげをもってはじめて大学に入学したのが24歳の時でした。東京大学の文科Ⅲ類に合格し、「せっかく大学に入学するのだから、手に職をつけるように」という母の言葉が忘れられません。

その後、まったく手に職がつかない教養学部後期課程と大学院に進学することになります。思えば、「早くお金を稼いで自立したい」という欲求と、「実利のために学術的関心を利用したくない」という思いのせめぎあいの中につねにあった、と言えるかもしれません。博士号取得後は12年にわたって東京大学教養教育高度化機構で特任教員として、前半は授業外活動推進を通じた「タフな東大生」育成、後半は初年次ゼミナール理科の運営と授業実施に携わりました。大学は勉強さえしていれば周囲から文句を言われない大変居心地のよいところですが、社会資源を大量に消費して学問の自由の恩恵にあずかっている以上、世の中に実在するさまざまな社会問題に対してその成果を応用する途を示さないわけにはいかないでしょう。そのために必要なのは学問的誠実性に加えて、他者と共同して社会に価値を生み出していく実行力だと思われます。担当してきた教育プログラムはいずれも、これらの両輪を目指したものでした。学問的誠実性は従来の意味での大学の質保証にかかわりますが、社会実践の面もかためていかなければ、学位取得者および大学がこれからの社会で生き残っていくことは難しいでしょう。

さらに、教員として大学の実務に携わってきて切実に思うところは、大学やアカデミックなシステムが肥大したために組織維持に多くのコストが取られ、研究者が本来の研究や教育に注力するリソースが削がれる一方、学生・研究者の学問的成果に対してはそれに見合う価値づけが行われていないということです。こうした状況下では、学位の価値を学生に納得させることは難しくなっていきます。改善していく方策を、実務経験をもとに調査・提案していきたいと考えております。

大学受験をするつもりであることを伝えた時に、フリーター仲間に「大学なんかに行って何のためになるの」と問われました。「従来通りの大学のあり方がまだしばらく続くかどうかは分からないが、学位取得には社会的価値がある」と言えるような質保証の在り方を、皆様と探求させていただきます。これからよろしくお願い申し上げます。

さかぐち きくえ 博士（学術）（東京大学）

令和4年3月まで 東京大学教養学部附属教養教育高度化機構特任准教授

令和4年4月から 本機構研究開発部教授

○李 敏 研究開発部教授



偶然にも機構の研究開発部に就任したこの4月1日は、私の来日20年目に当たります。来日10年目の2012年に、当時勤務していた広島大学高等教育研究開発センター長の勧めで某団体の周年行事の一環として記念論文を執筆しました。外国人の目で日本社会を観察したこの論文は視点がユニークと評価され、めでたく受賞しました。それまでは、膨大な知識が前提となる比較研究を扱う勇気をなかなか持てず、もっぱら個別の国の教育のことをテーマに研究を行ってきました。しかし、この論文の執筆がきっかけで、直接に比較を行わなくても外国人としての視点で滞在国の社会を観察するのならば、その国の人が見慣れた風景と異なるものが見えてくると実感しました。30歳近くで来日したため、完璧な日本語が話せないことをずっとハンディキャップに思っていたのですが、逆に日本の外で培われたこの「異質性」こそが私の強みでもあると気付く瞬間でした。

前職の信州大学では外国人でありながら、日本の高等教育史、教育制度、労働市場などを教える授業を担当しました。気が付けば日本の特殊性を語るような異質的な授業となっていました。この外国人としての視点が目から鱗のものが多く、受講者からはかなり好評を受けました。しかし、なぜ海外と比べ、日本がこんなに特殊なのかと学生に説明するためには歴史を辿らなければなりません。なるほど、比較とは他国との比較だけでなく、過去との比較でもあるのだとその時気付きました。

日本も中国も現代高等教育の諸制度のほとんどが欧米をモデルとしたのですが、自然発生的に生まれた欧米の高等教育制度と違い、過去を辿れば、後発国としての日本と中国は各時代における自国のニーズに応じて都合よく欧米の教育制度を導入した歴史がありました。一方、欧米の制度を導入するまでにはすでに独自の教育制度と伝統があったため、一口に高等教育とは言え、国によって制度を構成する地層が異なります。そのため、高等教育に関してはそれぞれの国がそれぞれの特殊性を持っているのも至極当たり前になります。おそらくここ機構の仕事をこなすためには、そのような地層の構成を理解することが欠かせません。高等教育に関する情報について事実を述べる程度で国内外に発信することだけでももちろん問題ないですが、なぜそのような制度なのかとさらなる情報を提供できれば、より質の高い国際交流と協力が繋がります。評価に関しても同じことが言えます。日本の評価事業担当者は細かい評価の項目に基づき、忠実に評価を行うことが得意ですが、なぜこのような評価項目にしたのか、果たして日本の大学に適合するかどうかともう一段と仕事をレベルアップするには、上記の比較の視点を運用できればより効果抜群です。今後の仕事で徐々に実践していく所存です。

昨今の世の中で評価の国際通用性、学位と資格の国際通用性がますます求められる中、何をもって通用性とするのかという疑問が常に湧いてきます。どこかの国か地域の制度をそのまま基準にするのならば、違う地層をなしている国に持っていく際に順調に根を下ろせないおそれもあります。ならば、それぞれの異質性を理解したうえで、共通の部分をとともに作ることが国際通用性なのではないかと今ぼんやりと考えています。

来日して20年も経ったので、ますます日本の考え方に同質化しつつあると感じていますが、強みの「異質性」を忘れず、次の10年の仕事に臨む所存です。皆様、ぜひご指導のほどよろしくお願いいたします。

り びん 博士（学術）（お茶の水女子大学）

令和4年3月まで 信州大学高等教育研究センター、東北大学大学院教育学研究科（クロスアポイントメント）准教授

令和4年4月から 本機構研究開発部教授

本年 4 月より機構の特任教授を拝命した。これからは主に理工学系の学位授与業務に従事することになるかと思う。とはいえ、ずっと研究所勤めだったので、これまで行ってきた研究などを紹介することで、ご挨拶に代えたいと思う。

屋内位置認識の研究

大学を卒業してしばらくは、図書館の蔵書情報をデータベース化する事業、大学をネットワークで結合する事業などを行っていた。当時はプロジェクトを図書館や大学計算機センターの職員の皆さんと一緒に進めていた。この機構の業務の進め方もこれに似ている気がする。

上記も一段落し、2000 年に新しく発足した国立情報学研究所に参加して、研究に没頭できる環境となったため、「屋内位置認識」をテーマに選んだ。

屋外では GPS（全地球測位システム）等によりカーナビ地図やスマホ地図に現在地を表示でき、それに基づいてナビゲーション（目的地までの経路案内）を受けることができる。しかしいちど屋内に入ると、GPS 衛星の電波を拾えなくなって、このようなナビゲーションを受けられなくなる。ショッピングモールや空港など、大型の建物で、あるいは複雑な駅の通路で、道に迷ったかたもおられるのではなかろうか。屋内位置認識は、そのような場面で使えるナビゲーションの実現を目標とする研究である。

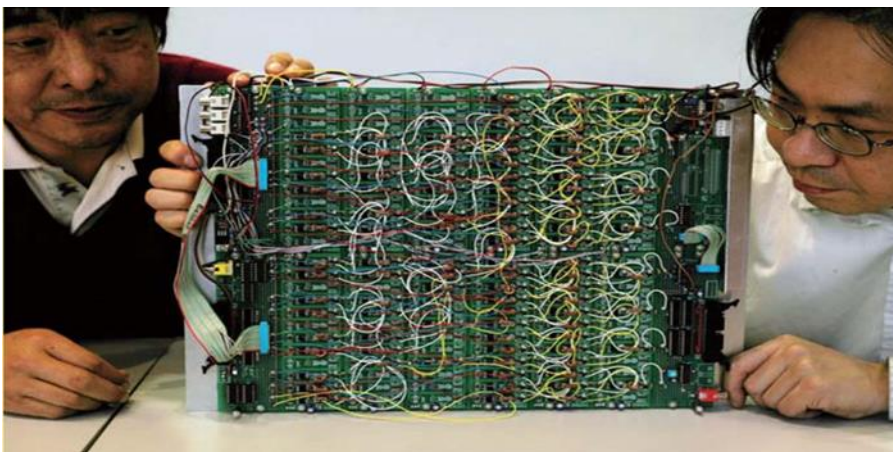
詳述は避けるが、屋外で使っている方法はそのままでは屋内で実施できず、衛星電波の代わりに音を使う、照明光を使うなど、いろいろなアイデアが出され、いまま盛んに研究されている。わたしもそこに参加し、いくつかの方法を開発し、評価してもらうことができた。ただ、現在でも屋内ではスマホ地図を使えないことからわかるように、実用化までには解決すべき課題も多い。

古い計算機

古い計算機（コンピューター）が好きだと言っていたら、日本の計算機の歴史をまとめるのを手伝ってくれないかと言われ、情報処理学会の歴史特別委員会に所属している。戦後から半世紀ほどのコンピューターの歴史を記述すること、保存すべき計算機等を認定すること、などが主な活動内容だが、いつの間にかわたしのところに、動かなくなった計算機を復元する仕事が舞い込むようになった。2 例ほど紹介する。

パラメトロン

今のコンピューターは半導体による計算素子を使うが、初期には真空管など、別種の素子を使っていた。そういうものの中に、日本で開発され、一時、ほぼ日本でのみ使用されていたパラメトロンという計算素子がある。それに使用される特殊なフェライト素材はもう生産されておらず、ここ半世紀は動くパラメトロンを見た人はいなかった。



試作したパラメトロンによる 8bit 全加算器。

左が筆者、右は製作を手伝ってくれた総合研究大学院生（2008 年当時）の前田さん

そこで筆者は、いまでも入手できる素子でパラメトロンを復元し、2008 年に行われたパラメトロン計算機 50 周年の席でそれを披露した(前頁の写真)。当時パラメトロン計算機に従事していた人たちに大人気だった。

微分解析機

これはもっと古い、70 年以上まえに作られた純機械式の計算機である(右の写真)。東京理科大学の博物館に、まったく動かない形で展示されていたものを、もう一度動かしてみないかと持ちかけられ、復元したものである。足りない部品や歯車は NICT(情報通信研究機構)に頼んで機械加工で作ってもらった。もともと戦前に、三鷹の軍用機などを生産していた工場で作られたものだそうだが、当時の精密加工技術に驚いた。これが再び動くようになった時はけっこう話題になって、新聞各紙や TV ニュースなどで取り上げられた。



70 年ぶりに再生した微分解析機(東京理科大学蔵)

研究は回り道が楽しい

研究は、最初にゴールを想定して、最短距離でそこに到達できるように計画するのが当然だ。でもいざ実施してみると、思いがけない障害が現れ、その解析や回り道の検討をしなければならないのが普通でもある。そこに問題を解決する楽しみや新しい発見があり、場合によると途中で方向や目的地が変わることもある。論文にはそのことを明示的に書かれていなくても、読んでいれば自然と事情がわかり、読者として共感したり、応援したりのドラマが生じる。機構に提出される報告やレポートでも、そのような曲折のあるものを期待している。

はしづめ ひろみち 工学博士(東京大学)

令和4年3月まで 国立情報学研究所 アーキテクチャ科学研究系教授、総合研究大学院大学教授

令和4年4月から 本機構研究開発部特任教授

学位授与事業

短期大学・高等専門学校卒業者等を対象とする単位積み上げ型の学位授与関係

当機構では、短期大学や高等専門学校を卒業、あるいは専門学校を修了するなど、すでに高等教育機関において一定の学習を修めた者に対して、新しい学士への途を開いています。

当機構の「学士の学位」を取得するためには、上記学校を卒業または修了するなど一定の学習を修めた後、大学において科目等履修生制度を利用するなど必要な単位を修得し、「修得単位の審査」及び「学修成果・試験の審査」を受ける必要があります。この二つの審査に合格すると、大学卒業者と同等以上の学力を有すると認められ、「学士の学位」が授与されます。

（※短期大学・高等専門学校卒業者等を対象とする単位積み上げ型の学位授与（学士）について詳しく知りたい方は、[こちら](#)をご覧ください。）

学位授与申請は、毎年度2回（4月期と10月期）受け付けており、令和4年度4月期においては、318人の申請を受け付けました。令和4年度4月期は6月12日（日）に試験を全国2か所（東京・大阪）で実施する予定です。新型コロナウイルスの状況により、延期等の変更が生じる可能性がありますので、機構ウェブサイトで最新の情報をご確認ください。

■令和4年度4月期申請における試験日程について

1 試験日・試験場

試験の区分	試験場	試験日時
小論文試験 （学修成果として レポートを提出した者）	東京地区 独立行政法人 大学改革支援・学位授与機構小平本館 東京都小平市学園西町1-29-1	令和4年6月12日（日） 10時30分～12時00分 15時00分～16時30分
	大阪地区 大阪私学会館 大阪府大阪市都島区網島町6-20	令和4年6月12日（日） 10時30分～12時00分
面接試験 （専攻の区分「音楽」、「美術」、 「演劇」のいずれかでレポート 以外の学修成果を提出した者）	東京地区 独立行政法人 大学改革支援・学位授与機構小平本館 東京都小平市学園西町1-29-1	令和4年6月12日（日） 面接試験時間は受験票で ご確認ください。

2 受験票などの送付

受験票は、受験者心得とともに試験日の10日前までに送付しています。令和4年度4月期においては、5月20日（金）に送付しました。

[お問合せ先]

独立行政法人大学改革支援・学位授与機構管理部学位審査課

〒187-8587 東京都小平市学園西町1-29-1

電話：042-307-1550（問合せ専用）

受付時間：9:00～12:00 13:00～17:00（土・日曜、祝日、年末年始を除く。）

学位審査会専門委員協議会の開催について

令和4年4月14日（木）に、学位審査会専門委員のうち令和3年度及び本年度より新規に就任された委員等を対象に、今後の審査等が適切かつ円滑に進められるよう、協議会をオンラインにて開催しました。なお、本年は協議会の実施に代わり資料送付のみとした令和3年度より新規に就任された委員にも御出席いただきました。当日は、機構の担当者から学位授与制度及び審査スケジュール等の説明が行われました。



学位審査会専門委員協議会（令和4年4月14日）

評価事業

○令和4年度認証評価機関連絡協議会評価担当職員研修の開催について

令和4年4月27日（水）に令和4年度認証評価機関連絡協議会評価担当職員研修を開催しました。本研修は、我が国の高等教育の質の保証と認証評価の充実等を図るため、加盟14機関により構成される「認証評価機関連絡協議会」が主催し、その連携・協力事業の一環として、認証評価機関職員間の連携及び情報共有の促進と職員の資質向上を目的とし、各機関の若手職員が研修内容を企画しているものです。

一昨年度は新型コロナウイルス感染拡大の状況により中止となりましたが、今年度は昨年度に引き続き二度目のオンライン形式による開催となりました。

当日は、当機構の光石理事による開会挨拶の後、日本高等教育評価機構の伊藤常務理事・事務局長による初任者向け講演、及び当機構の土屋研究開発部長による経験者向け講演を参加者へ同時配信し、その後、初任者・経験者共通のプログラムとして、文部科学省高等教育局高等教育企画課高等教育政策室の岸良室長補佐による講演を配信しました。

また、オンライン形式の研修では初の試みとなるグループディスカッションが行われ、活発な議論の後、各グループがその成果を発表し、モデレーターを務められた大学基準協会の工藤事務局長による講評が行われました。最後に、大学・短期大学基準協会の福治事務局長による閉会挨拶をもって研修を終了しました。

研修の参加者は約120名に上り、認証評価制度に関する理解及び認証評価機関相互の情報共有につながる研修となりました。



光石理事による開会挨拶



土屋研究開発部長による講演資料

○ 新型コロナウイルス感染症対策について

当機構では新型コロナウイルス感染症対策として、令和4年4月の機構主催の各行事について、以下のとおり対応を行い開催しました。

令和4年4月

開催予定日	行事名	対応	担当課
14日	令和4年度学位審査会専門委員協議会	ウェブ開催	学位審査課
27日	令和4年度認証評価機関連絡協議会評価担当職員研修	ウェブ開催	評価企画課

主要行事日程

○ Schedule

5月

日	行事名	担当課
20 日	学位審査会（令和4年度第1回）	学位審査課
中旬	高等専門学校機関別認証評価委員会（第1回）	評価支援課
25 日	国立大学教育研究評価委員会（第67回）	国立大学評価室
下旬	高等専門学校機関別認証評価検討ワーキンググループ（第1回）	評価支援課

6月

日	行事名	担当課
12 日	令和4年度4月期学位授与試験（小論文）（東京地区、大阪地区）	学位審査課
12 日	令和4年度4月期学位授与試験（面接）（東京地区）	学位審査課
中旬	令和4年度高等専門学校機関別認証評価における評価担当者に対する研修	評価支援課

＊ 新型コロナウイルス感染症の状況により、上記のスケジュールについて変更、延期などの影響が生じる可能性がありますので、機構ウェブサイトに掲載される最新の情報をご確認ください。



独立行政法人

大学改革支援・学位授与機構

National Institution for Academic Degrees and Quality Enhancement of Higher Education

